



昨年の12月初めのころのこと、ひとつの旋律がしきりに街に流れていることに気付いた。インドネシアの多くの歌が、甘くやさしくややものうげな調子を基調とするのにひきかえ、それは、たとえば山川のせせらぎの峡谷にこだまするような、澄明なひびきを伝えていた。年末のある日、私は耳になじんだ一節をそっと口にして市場でカセットテープを買い求めた。そして、そのメロディーが、Ebiet G. Ade の *Camellia II* というアルバムの最初におさめられている“Berita Kepada Kawan”（「友への便り」）であることを教えられた。私はその後、柄にもなく新聞や雑誌の「歌謡曲情報」にまで目を通すようになった。

エビートということし25歳の一青年が、1979年6月にジョクジャカルタ市で作詞作曲し、みずからギターを奏でて吹き込んだ「友への便り」は、ジャカルタの歌謡曲（POP）市場に彗星のように登場し、昨年末からことし初めにかけてインドネシアの歌謡界を席卷した歌であった。それは、昨年12月からことし2月までの3カ月間、「歌謡曲ベスト20」の「王座」を維持したという。

この間、エビートと彼の歌をめぐる記事がしばしば紙面を賑わし、週刊誌『テンポ』は特集記事を組む（3月8日号）ほどであったから、彼の歌の出現とその受け入れられ方はたんなる音楽ニュースをこえた社会的意味をもつものとして了解されているといえよう。

エビートの曲は「友への便り」に限らずいずれもさわやかに澄んでいる。『テンポ』誌はこれを「リリズムの再生」とであると述べているが、いかにも私のところを先ずとらえたのもこの透明度の高い音色であった。とはいえ、1955年に中ジャワのパンジャルネガラに生れた詩作とギターを愛するこの青年が、「私はひとびとに詩を伝えたい。メロディーを付したのは私の詩を読んでほしいか

「友への便り」

土 屋 健 治

らにほかならない」というとき、「友への便り」は文字通りひとつのメッセージ（便り）であることに気付く。「異邦人」である私と異なって、ここではエビートの旋律は歌詞と一つになっている。それはおおよそ次のような情景であろうか。

草の萎え石くれのにぶくひかるあれ野に、泣きぬれて牛を追う子供がいる。遠い昔に両親を天変地異でなくしたという。このくにの何故にわざわざの多かりしやと問えど、天地寂寥として、餅はかえらない。それは、神がわれらの所業を厭い、自然がわれらを疎むことのしるしなのか。

友よ、旅の便りを伝えます、と歌い出されるこの詩は、光と色彩にみちたつねのインドネシアのイメージとはまた別の世界を伝えている。それは花の咲き音楽の奏でられる世界とは別の、あれ野に風のしょうしょうと吹き渡る世界である。そこでは、風景は漂白されている。

私は教室で、エビートのメッセージがこの国の津々浦々で共感をえた理由を尋ねたことがある。「とにかく良い。こころが洗われるようだ」という学生の答えは、それ以上のことを知ろう（「分析」しよう）とする私を突き放す強さがあった。だから、「地にわざわざの充ちるとき……」という「ジョヨボヨの予言」をこの歌に重ね合わせても、せん無いことなのであろう。

とはいえ、「友への便り」にみられるのは、「自然」を「自我」と相渉るものとして観照しそれをたかい抒情性で表現するという、かつて80年前にカルティニが示したのと同質の感性であるように私には思われる。その漂冽の抒情がひとのこころをうつ。

あるいは、カルティニとともにエビートもまた、ontwikkeling の時代のたぐいまれな証人なのかもしれない。（1980年3月10日記・ジャカルタで）（京都大学東南アジア研究センター助教授）